

“東芝ならではの” 商品への挑戦

執行役上席常務
東 実



将来、歴史を振り返ったとき、アテネオリンピックが開催された2004年は、日本が得意とするデジタル家電が本格的に普及を始めた重要な年と位置づけられることでしょう。大画面で臨場感が増したフラットパネル デジタルテレビ、好きな番組を好きなときに見ることのできる大容量 HDD 付き DVD ビデオレコーダ、インターネットを通じてダウンロードした音楽を 1,000 曲以上持ち歩ける携帯機器、などが急激に身近な存在になりました。

このように技術革新が進み、新しい商品が続々と世に出る活況が数十年ぶりに訪れている状況ですが、事業に参入している家電・電機メーカー各社の業績は明暗を分けるかたちになっています。いろいろな要因が考えられますが、商品でも広告・宣伝でも“自社の特長”を強くアピールし、お客さまからの共鳴を勝ちえたメーカーが好業績を上げています。“モノ”があふれる時代と言われているなか、新しいといえども同質な商品はお客さまの支持を得られません。お客さまの“ココロ”に触れる商品が求められているのだと思います。

今年、東芝は創立 130 周年を迎えます。創業者である田中久重は“飽くなき探求心”と“新しいものに挑戦する情熱”を人一倍持っていたと伝え聞いています。この創業者の精神を受け継ぎ、“東芝ならではの”の商品を輩出する活動に東芝グループ丸となって挑戦を始めています。お客さまの“ココロ”に単刀直入に訴えることを念頭に置いて、東芝グループの幅広い事業・商品群を“驚きと感動”、“安心と安全”、“快適”の三つにくくり、それぞれのお客さま価値を今まで以上に明快に訴求していきます。

2004 年度は助走の年であり、変身を実感していただけるにはまだ十分ではないと思っておりますが、ギネスブックに認定された世界最小の 0.85 インチ HDD、キヤノン (株) と共同開発した理想のフラットパネル ディスプレイである SED、台湾の TAIPEI 101 ビルに採用された世界最高速エレベーター、11 月にサービスを開始した世界初のモバイル放送など、その胎動を感じていただければ幸いです。

このほか、デジタルプロダクツ分野では、AV ノートパソコン“Qosmio”、新頭脳搭載のデジタルハイビジョン液晶テレビ、HDD&DVD ビデオレコーダ、音楽プレーヤ感覚の携帯電話などを製品化し、将来技術として、ハイビジョン画質に対応する HD DVD 技術や世界最小の燃料電池技術を開発しました。電子デバイス・材料分野では、新配線アーキテクチャの高速 SoC、次々世代の低消費電力トランジスタ技術、及び高密度記録対応の磁気ヘッドの要素技術などを開発しました。また、社会インフラ分野では、高効率発電プラントや水素製造の要素技術、及び電子調達などのソリューション技術や通信・放送の基盤となるインフラストラクチャを開発しました。更に、医用機器分野では撮像時間を短縮した X 線 CT 装置を開発し、ネットワークサービス分野においてはサイト内検索 ASP サービスの提供を開始しました。

以上、未来を見据えた東芝グループの技術開発の状況と成果の一端を紹介いたしました。ぜひ本文をご一読いただき、皆さまのご助言、ご指導をいただければ幸いです。